

五木寛之

浅の川暮色



浅の川暮色

五木寛之

五木寛之 (いつき・ひろゆき)

1932 (昭和7) 年9月福岡県に生まれる。生後まもなく朝鮮にわたり47年引揚げ。52年早稲田大学露文科に入学、57年まで在籍。業界紙編集者、レコード作詞家、ルポライターなど多くの職業をへて66年「さらばモスクワ愚連隊」で第6回小説現代新人賞、67年「蒼ざめた馬を見よ」で第56回直木賞を受賞。「青年は荒野をめざす」「デラシネの旗」「青春の門」「風に吹かれて」ほか多数の作品がある。

浅の川暮色

昭和五十三年十月三十日 第一刷
昭和五十四年三月五日 第四刷

定価 八五〇円

著者 五木寛之

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

〒一〇二東京都千代田区紀尾井町三
電話東京 (〇三) 二六五―一二一

印刷所 大日本印刷

製本所 加藤製本

※万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします

浅の川暮色 目次

浅の川暮色

5

帝国陸軍喇叭集

49

ボンジョールノ野郎

89

セルゲル通りの雨

141

東京より愛をこめて

169

小立野刑務所裏

263

浅の川暮色

装
幀
朝
倉
撰

浅の川暮色

1

日本海と白山連峰にはさまれた細長い平野部にある小松空港は、上空の気流が悪いことと春雷の被害が多いことでも知られている。航空自衛隊のシベリアに面した強力な基地でもあり、空港自体は広く、滑走路も長いのだが、すでにいささか時代おくれの感じのする全日空のフレンドシップ機では荒天や悪気流の際の着陸がかなり難しいらしく、空港を目の下にしながら転回して名古屋へ引き返したりすることも少なくない。

森口守は、曇天の下をさつきから首をかしげるように機体を傾けて旋回をつづけているプロペ

ラ機の窓から、やや不安な気持で下界を見おろしていた。目的地はすぐ下にあるのに、機長は着陸するかどうか、まだ迷っているらしい。他の乗客たちも落着かない顔で窓からのぞいたり、スチュワデスに質問したりしている。

「どうなんでしょうか。こうしてみると何ということもなく降りられそうな感じですがなあ。名古屋へでも引き返されたら、えらい迷惑だが——」

隣の席に坐って、さつきからコートを着たり脱いだりしていた初老の紳士が、すがるような口調で森口に話しかけてきた。

「かなり風があるようですね。それに視界もあまり良くないし、どうなりますか」

「こういうことがよくあるのですか」

「さあ、このコースは余り飛んだことがないものですから。なにしろ十何年ぶりの北陸でしてね」

「失礼ですが、金沢の小児科学会に出席なさるのでは？」

「いいえ、私は新聞社のものです。どう見てもドクターには見えませんでしょう」

森口が苦笑すると、これはどうも、とその紳士は首を振って、自分は東京の大学病院に勤めている者で、明日から金沢で開かれる学会に出席するためにやってきたのだ、と早口で説明した。

「金沢ははじめてなんです、という町でしょう。話では京都や高山と並ぶ古い日本的な城下町だそうですね」

彼は何か喋っていないければ不安でならないらしく、機体がきしみ音を立てて揺れる度に身を固くして森口に話しかけてくる。

「ええ。日本的——と、言えば、まあ、たしかにそうかも知れませんが」

森口は、隣の男のすぐるような目付きが少しわずらわしく、視線を外にそらせて曖昧な口調で答えた。窓の外にななめに傾いた海面が見え、やがて霧のような雲がその暗い海を隠した。着陸か帰投かの決定はまだつかないでいるらしかった。

「こんど東京のSデパートで加賀美術工芸展という催しをやることになりましたね」

と、森口は独り言のように喋り出した。

「その打ち合わせのために金沢へ行くんです。うちの社の事業部で主催することになっているものですから」

「新聞社といっても、いろんな部門があるわけですね。記事を書くだけでなく」

「はい。私も少し前までは編集のほうにいたんですが。金沢は私が大学卒業後新聞社に入社し、間もなく地方回りに出された最初の勤務地でした。三年いて東京へ呼びもとされて、それ以来ずっと来る機会がありませんでね」

あの頃おれはいくつだったろう、と森口は目をつぶったまま考える。二十三歳か、たしかそれ位の年だ。全国紙の中でも知識人に読者が多いといわれる一流新聞の記者としてはじめて北陸へやってきたおれは、さぞかし気負い込んだ嫌味な青年だったにちがいない。東京の大学生活四年

間の間にどうやら身についた標準語を、ことさら歯切れのいい東京弁ふうに使ってみたり、下宿の床の間に「人民日報」や『ドストエフスキー全集』をわざわざ乱雑に積み重ねて気取ってみたい、また支局の裏の洋裁学校の生徒が集まる喫茶店にシヨスタコーヴィツチの〈森の歌〉のレコードをあずけておいて掛けさせたり、思い出すと背筋が汗ばむような進歩的ジャーナリストの卵だったのだ。新聞社にはいった後も、いつかは新鮮な感覚のシナリオの一本ぐらい世に送って、新聞記事を書くだけの男ではないというところを社の連中や昔の仲間に示してやりたいとひそかに考えていた。若かったのだと言えば、それも少しは当たっているだろう。だがそれだけではない自分のいやなところが、あの時期に集約されてくっきり現れていたのではあるまいか。大都會では目立たぬ部分が、金沢という古く静かな町を背景にして、なお一層きわ立っていたような気がする。

いま、森口は金沢について、いや、金沢にいた頃の自分と、そしてその自分にまつわる様々な事件について、思い出すことが何となく怖いような、そんな気分の中にいた。青春を懐かしむというのとは反対に、それをまざまざと記憶の底から呼びさますことで、思わず顔をおおいたくなる感じなのである。罪の意識、というのでもない。不快な思い出、というわけでもない。むしろそれは生理的な圧迫感のようなものだった。いつか社の上役にきいた狭心症の発作が起きる前の、何となく重苦しい不安感というのは、さしずめこんなものではなからうか。

「降りるようです」

隣の紳士が緊張した声で小さく叫んだ。フレンドシップ機は、エンジンをしばらくたりふかしたりしながら次第に高度をさげはじめた。

「よかったですね」

森口はようやく目を開けてベルトを締め直し、頭の中のもやもやを振り払うように気密窓からせり上ってくる地上を眺めた。海岸線が流れ、白山の影が傾き、やがて灰色の長い滑走路と巨大な格納庫の連なりが迫ってきた。格納庫の前に整然と並んでいるジェット戦闘機の列が、不意に森口のぼんやりした心に硬い現実感呼び覚ました。彼はネクタイの結び目に手をふれると素早く首を振って、東京本社から地元の協賛団体との折衝にやってきた新聞社事業部次長の顔に返った。やがて軽いショックがあり、プロペラ機は二、三度はずんで急な制動をかけながら速度を落とした。どうやら悪気流の中を無事に着陸したらしかった。

「この線に乗っている機長の中には、元海軍航空隊のパイロットが何人かいるんだそうですよ」
元氣をとりもどした口調で隣席の紳士が言った。

2

空港には支局の若い記者が車を持って迎えにきていた。

「かなり揺れたようですね」

若い支局員は空港でずいぶん長く待っていたらしく、時計を気にしながら社旗を立てた車に森口を乗せると、支局へ急いでくれ、と運転手に命じた。その口調に森口はちよつと抵抗をおぼえて、若い記者の顔を眺めた。白いシャツにストライプのクラブ・タイをしめ、靴もきちんと磨いて、浅黒い顔にいかにも頭の切れそうな精悍さをたたえたその青年は、森口のそんな感情には気づかないらしく、歯切れのいい口調で最近の金沢の大学紛争の情況などを喋り、東京本社の編集局の動向などをたずねた。

「さあ。ぼくは今は事業部の人間だから」

と、森口は言葉を濁しながら、内心、十数年前の自分もきつとこんなふうに運転手に命令口調で指示したりしていたにちがいない、と考えた。

「きみは金沢は何年になる？」

「二年目です」

「どうかね、この町は」

「雨が多いんで閉口です。それに日本海時代だと言っても、やはりどこかもうひとつ活気がないですね。政治的にも保守王国だし。だいいちうちの新聞がこれほど伸びないというのは、一種の地元の後進性の証明みたいなもんじゃないんですか？」

「地元紙が圧倒的に強いということから」

「まあね」

「全国紙より地元紙が強いのは、むしろ後進性の反対じゃないのかな」

「まあ、そういう見方もできなくはないでしょうが」

若い記者は知的な読者を多くもつ自分のところの新聞が、この町でそれほど購読されていないことが不思議でならぬ表情で首をかしげた。それは森口も金沢へきたてのころ感じたことだ。おれはかなり長く、こういうエリート意識から脱け出せなかった、と、彼は車の窓の外に見える白山の稜線を眺めながら考えた。低い雲の壁を背おって長くのびている白山の姿は、どこか波打際にうちあげられた鯨の腹のような感じがした。

「きみたちは酒を飲むときは、どの辺で飲んでる？」

しばらくして森口がきいた。若い記者は首をひねって、スタンド・バーか寿司屋で飲むことが多い、と答えた。

「小料理屋なんかへ行くと金沢は高いですからねえ」

「次郎なんかはあまり使わないのか」

「次郎？」

「主計町かぞえまちの鍋料理の店さ。ほら、浅野川に面した古い木ざまきざまのある——」

「ああ、あの店か。ぼくは行きません。よく送別会なんかがある店でしょう？ それにぼくは座敷よりもカウンターのほうが好きですから。卯辰山うしんの中腹に洒落たレストラン・バーができてるのはご存知ですか」

「じゃ」

「金沢も変りましたからね。森口さんは昔、うちの支局におられたと聞きましたけど、もうその頃とは大違いのはずですよ。さっきの主計町だって今はもう尾張町ってなってるはずですよ」

「主計町という町名は、じゃあ失くなってしまったのか」

森口は、口の中で尾張町の次郎、尾張町の次郎、と何度かくり返して呟いてみた。だがどうしてもそれはどこかよその町の店の名前のようにしか感じられなかった。主計町の次郎、という言葉が、彼の記憶の中ではひとつながりの固有名詞のように刻みこまれていたからである。

「そうか。主計町もなくなったか」

森口は小さく呟くと、支局へ着いたら起こしてくれ、と頼んで体をずらし、腕組みして目を閉じた。頭の中であるひとつの名前が、螢火ほたるびのようにかすかにもったり消えたりしていた。主計町の次郎、という言葉に結びついたその名前を、彼は本当は思い出さなくなつたのである。実際にはもっと早く金沢にやってきて関係者と話し合わねばならなかったのを、何やかやと理由をつけて今日まで引きのばしてきていたのも、もしかすると自分では意識せぬままにそのことになつていたのかもしれない。

きてしまった以上、もう仕方がない、と、彼の胸の中で自分に言いかけた。思い出してしまった以上、もう仕方がないのだ。そして、金沢へやってきたからには、その事をさけて通ることが不可能だということは最初からわかっている。